「国語科共同授業研究会」報告 (2)

望月　善次*

I　はじめに

今回行う表記研究会報告は，本誌第3号（1981－3）における報告に続くものである。前回の報告が，昭和55年度に行われた第1回～第3回（第4回については予定のみ）を中心としたものであるのに引き続き，今回の報告は，昭和55年度最終回の第4回と，昭和56年度に行われた第5～9回を直接の対象とするものである（第10回については予定のみ）。なお，本報告が，研究報告というよりも実践報告的性格を有するものであること，また報告が報告者の個人的立場からなされることのいずれも前回に準ずることである。

II　昭和56年度方針

昭和55年度における4回にわたる研究会の実績を踏まえて，所謂「附属4校」と学部とから各代表者が集まり56年度方針について話し合いをもった（'81. 4. 10.《金》）。そこで得られた結論は，それぞれ各校・学部にもち帰られ了承されたが，大要は以下のごときものである。

(1)例会の回数：昨年度4回の実績を踏まえ，今年度は6回を試行する。

(2)重点例会の設置：各例会とも，各校・学部各1名は最低出席することとするが，重点例会を設置し，その際は構成員の過半数が出席する様に努力する。なお，重点例会の際は，中学校のクラブ活動の関係から，開始時間を午後6時とする。本年度は，最初の5月例会（第5回）と最後の2月例会（第10回）とをこれに当てる。

(3)テーマを設定：特別なテーマについては，本年度もこれを設定しない。ただし，各授業提案に際しては，そのテーマができるだけ明確になるよう各自努力する。

(4)会場：従来通り学部において行う。

(5)会費：新たに徴集することとし，1回当り100円とする。したがって56年度においては年会費600円とする。各例会毎の徴集を原則とするが一括納入も差し支えないものとする。なお，正規メンバー以外の飛び入り参加についても上記に準ずることとする。

(6)会への学生参加：原則的には自由である。具体的には，学生から実際に参加希望のあった際改めて検討する。

(7)役割分担：下記のごとく役割分担する。

(イ)記録：原則として授業提案校が行う。ただし第7～8回は，学部が行う。なお，一定の書式を設けることとし，その案は後日学部から提案すること（後日提案了承）。

(ロ)進行：原則として次回授業提案校が行う。ただし，第7～8回は学部が行う。

(ハ)会計：学部が行う。

(ニ)懇親会：授業提案校が行う。ただし，第7～8回は学部が行う。

(8)昭和56年度予定：〔　〕は授業提案校等。

＊岩手大学教育学部国語科

＜第５回＞５月21日(木)〔附属小〕

＜第６回＞７月３日(金)〔仁王小〕

＜第７回＞10月８日(木)～９日(金)〔上田中教育実習生〕

＜第８回＞10月24日(土)〔教育実習反省会シンポジウム：含学生〕

＜第９回＞11月16日(月)～20日(金)〔附属中〕

＜第10回＞２月５日(金)〔上田中〕

以上の了承事項について三つほどのコメントをつけ加えたい。

一つは，各校・学部が昭和55年度の実践に対して一定の評価をし，昭和56年度にもこれを継続しようとしたことである。

二つ目は，上記(1)例会の回数，に関連する。前年度の実績の上に今年度は更に２回を積み上げることとした。附加する２回の内容については，本研究会設立の直接の契機となった教育実習との関連をもつものというところに話が落ち着いた。更に具体的には，教育実習生の授業を対象とする授業分析（第７回予定）とシンポジウム形式による教育実習反省会（第８回予定）とがもたれることになった。

三つ目は，上述の(3)テーマ設定，に関連する。このことに関しては，前回の報告において「会は今，年間を通じてのテーマ設定，役割分担の話し合いへ進もうとしている」（『本誌』No.３　P.40）と述

第１表：「国語科共同授業研究会」（第４～９回）概要

回数（年度別）	月/日（曜）	時間	場所	話題提供者（所属大は学部）	テーマ	授業提案者（所属）	提案授業	参加者 ○：進行 □：記録	備考
4（55・4）	'81・2・13（金）	16:30～17:00	岩大教育学部附属教育工学センター	芳坂佳宣	「語彙の指導」について	吉丸芳子（仁王小）	モンゴル民話，牧場勇二再話「スーホの白い馬」〔光村小五下〕	前川清志，横沢幹雄，吉丸芳子（仁王小）柴田礼司，古水一雄（上田中）原田貞義，芳坂佳宣，望月善次（学部）	特定記録なし
5（55・4）	'81・5・21（木）	16:30～21:15	同上	望月善次	文学作品を読み返して（作文） 大村はま研究への一観点 ―オモ・ガス・ケス（字が動物）への確信の深さ―	高橋繁（附属小）	文章を読み返して（作文）〔教出 小上〕	千田直治，高橋繁，阿部敬行（附属小）前川清志，横沢幹雄，（仁王小）照井健（附属中），南岩雄，八重樫聖勝，岡田安生，柴田礼司*（上田中）遠藤哲夫，野坂幸弘，中村一基，望月善次（学部）	授業 遠藤哲夫（学部） ※進行は仁王小予定との交代．
6（55・5）	'81・7・3（金）	19:40～20:30	岩大教育学部会議室	中村一基	会話の形成と展開	前川清志（仁王小）	自然を守る〔光村 小6上〕	高橋繁，阿部敬行（附属小），吉丸芳子，前川清志，横沢幹雄，（仁王小），三浦孝（附属中）柴田礼司，古水一雄（上田中）	
7（55・5）	'81・10・8（木）	18:00～21:30	岩大教育学部附属教育工学センター	原田貞義	喫茶店かっぱやる	下板橋明彦光（上田中教育実習生）岡田安生指導	言葉と意味「意味をさぐる」（光上教芳）〔光村 中2〕	吉丸芳子，横沢幹雄，阿部直子（仁王小）高橋繁，阿部敬行（附属小），柴田礼司岡田安生（上田中），原田貞義，芳坂佳宣，中村一基，望月善次（学部）	意見交換：昭和56年度教育実習について． ※授業参観のみ
8（55・6）	'81・10・24（土）	15:00～17:15	岩大教育学部 II号館（279）	千田直治（附小） 4年次学生アンケート集計報告	海外視察ルポ 本年度の教育実習と今後指導にむけていたいこと	登壇者 高橋繁（附属小）横沢幹雄（仁王小）柴田礼司（上田中）藩合修一（附属中）望月善次（学部）	シンポジウム4 本年度教育実習の実態と今後の課題	千田直治，高橋繁（附属小）吉丸芳子，阿部直子，横沢幹雄（仁王小）柴田礼司（上田中）藩合修一（附属中）本堂寛，野坂幸弘，原田貞義，中村一基，望月善次（学部）学生39名．進行は熊谷継一（学生）	兼 昭和56年度教育実習事後指導（国語科） 提案 本堂寛
9（55・6）	'81・11・19（木）	18:30～21:15	岩大教育学部附属教育工学センター	望月善次	「視点（point of view）論」整理の一観点	藩合修一	夕焼け（吉野弘）〔光村 中2〕	阿部敬行（附属小）藩合修一，照井健（附属中）柴田礼司（上田中）原田貞義，芳坂佳宣，望月善次（学部）	

べたところとも対応する。ところで，この点については，会としては，年間を通してのテーマを設定することには，現状における実態からは無理があり，もう少し自由に地力をつけて行こうというところに意見が落ち着いた。なお，会としてのテーマ設定については，個人的見解をⅣにおいても記す積りである。

Ⅲ　研究会概要（第１表参照）

Ⅱ－(8)に記した年度当初予定と比較しても明らかな様に（細部での変更はあったとはいえ），ほぼ予定通りに行われたとしてよいであろう（第10回についても予定通り行われる予定である。授業提案者としては，南　岩雄（上田中）が予定されている）。しかし，予定通りといえば，いかにも容易の響きがあるが，勤務先と勤務条件とをそれぞれ異にし，しかも互いが，それぞれの職場において多忙である（就中「附属４校」メンバー）という昨年来の条件に変化のないままの予定通りであったことを附加しなければならないであろう。

Ⅳ　研究会の今後に関する個人的見解

研究会の今後については，構成員全体の討議に附されて決定さるべきものであることは改めて言挙げするまでもないことである。それゆえ，本報告の任務は，その全体討議の前段階の作業たる個人的見解の一つを述べることにあると考えてよいであろう。

以下，問題にすべきと思われる点のいくつかについて列挙することとする。

(1)研究会の回数

「附属４校」のメンバーが，それぞれの学校の任務以外に，学校を越える県や市等の組織の中で中核的役割を果さねばならぬ現状においては（ⅢおよびⅣ－(4)をも参照）研究会の確保は容易なことではない（メンバーの多忙による開始時間の遅延や，会自体の時間延長ムードが，このことに拍車を加える）。息の長い研究として存続させて行くためには，どの位の回数が適当かを改めて問題にしなければならぬであろう。

(2)授業提案テーマの明確化

昭和56年度における授業提案テーマは以下のごときものであった（第７～８回は，教育実習生対象のため以下の記述においては一応除外する）。[1)]

＜第５回（作文）＞

(イ)記述後に限定されぬ（含記述前，記述中）推敲指導のあり方。

(ロ)教科書教材利用時の推敲時期－児童生徒自身の作文体験との関連において－

＜第６回（説明文）＞

(イ)説明文における語句のふくらませ方としぼり方。

(ロ)筆者の意図への迫り方。

(ハ)抽出児設定による児童の理解度確認。

＜第９回（文字・韻文）＞

(イ)原作者の用いている漸層法・言葉の言い換えに着目させることを通して「やさしい気持に責められる娘」に共感させる。

(ロ)発問を，疑問を深め，理解を促し，理解の質を深めるものと把握し，生徒の情意に働きかける。

以上掲げたごとき授業提案テーマは，ほとんどがその提案の範囲が大きすぎ焦点が絞り切れない様に思われる。[2)]

(3)会としてのテーマ設定

一定のテーマをもたぬ研究会というものは，ともすれば問題追求の深化に弱点をもち易い。テーマを特定することにより研究会が硬直化して了っては，元も子もないのだが，本研究会もテーマを設定しうる地力をつけて来ている様に報告者には感じられる。その際，テーマ特定の方向としては，次の様なものが考えられると思う。

(イ)単一テーマ：特定単一のテーマにより各校・学部が共同研究する。

(ロ)複数テーマ

(a)各校（各人）の取り組んでいるものを更に明確化したものの提案。（第6，9回は各校に，第5回は個人に比重のかかったものとして位置づけうる）

(b)各校の授業提案のジャンル別分担。

ex．文学（散文・韻文），説明文，作文…。

(c)学部教官の専門に合わせた授業提案

ex．古典・近代文学，国語学，漢文学…。

(4)岩手県国語教育研究会連合会（県国研）との連携

本研究会そのもののことではないが，本年度の特筆すべきことの一つは，県国研へ本学部が大学としての組織参加を許されたということであろう。これは，多く遠藤哲夫の永年にわたる努力（S. 49. 4～51. 3附属中学校長，S. 52. 4～県国研会長）によるものである。ⅢやⅣ－(1)で述べたごとく，「附属4校」のメンバーがこの県国研においても中心的役割を果していることを考えると，この参加は本研究会にとっても大きな意味を有するものと考えてよいであろう。しかし，本研究会が県国研と相補的に発展するためには，いくつかの困難点があるのも事実でありそれを克服するための工夫も必要とされるであろう。[3)]

Ⅴ おわりに

前回の報告の末尾に「とにも角にも会はスタートした。（中略）今しばらくの間は，何としても会を継続させて行くことが第一に求められることであろう。そして，そのことがとりも直さず巨視的にも意味をもちうる現状にあることは『はじめに』において記した通りである。」（『本誌』No.3 P. 40）と述べた。ほぼ2年間にわたる積み重ねによる成長と，課題の明確化への展望を有しながらも基本的には先に述べた状況は変化していないと考えるべきであろう。一層の事実の積み上げを期したい。

注

(1)なお，第8回に関しては，報告者自身下記発表において，発表内容の一部として，それに言及している。

「国語科教師教育に関する一考察――教育実習事前・事後指導（国語科）をめぐって――」（第61回全国大学国語教育学会，1981. 11. 4 於佐賀大学）。

(2)授業目標の明確化については，例えば下記参照。

George Brown，Microteaching――a programme of teaching skills――，（London，1975），ジョージ ブラウン（斎藤耕二，菊池章夫，河野義章訳）『授業の心理学』（同文書院，1981）PP. 24～30。

(3)学部教官サイドからの，極めて具体的な一つの例をあげておこう。現状においては，教科教育担当以外の大学・学部教官が，小～高の授業と切り結ぶというのは，特別な場合と考えねばならぬであろう。仮に或る教官が偶々関心を抱き参加しようとする場合でも，多くの集会は参加費を払わねば参加できぬシステムになっている。参加費を払ってでも，という意気込がなければとするのも正論ではあろうが，大学・学部教官の現状からすれば非現実的であろう。参加意思を有する大学・学部教官を招待しうる方法を考えるところから協力の論を拡げて行くことなども現実的方策の一つであろう。